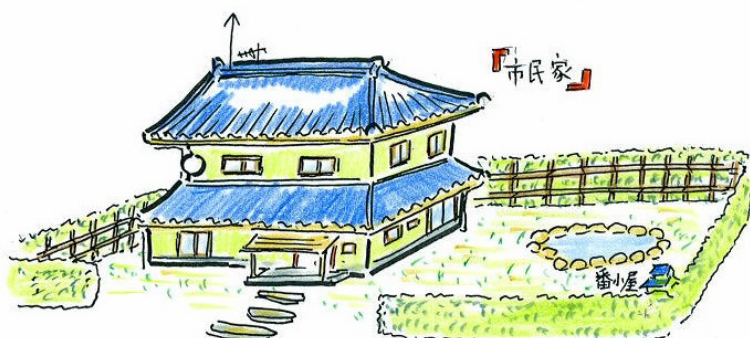


★★ 支援くんの火災予防奮闘記 ★★ これまでのあらすじ

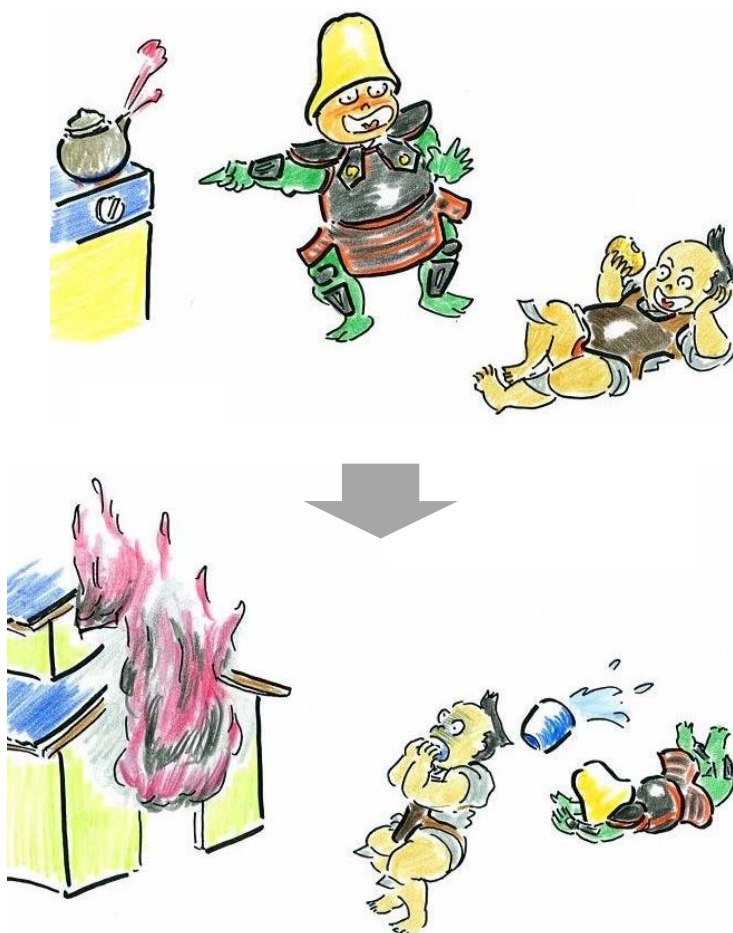
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん}中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くん比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

点得幼稚園^{てんとく}の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

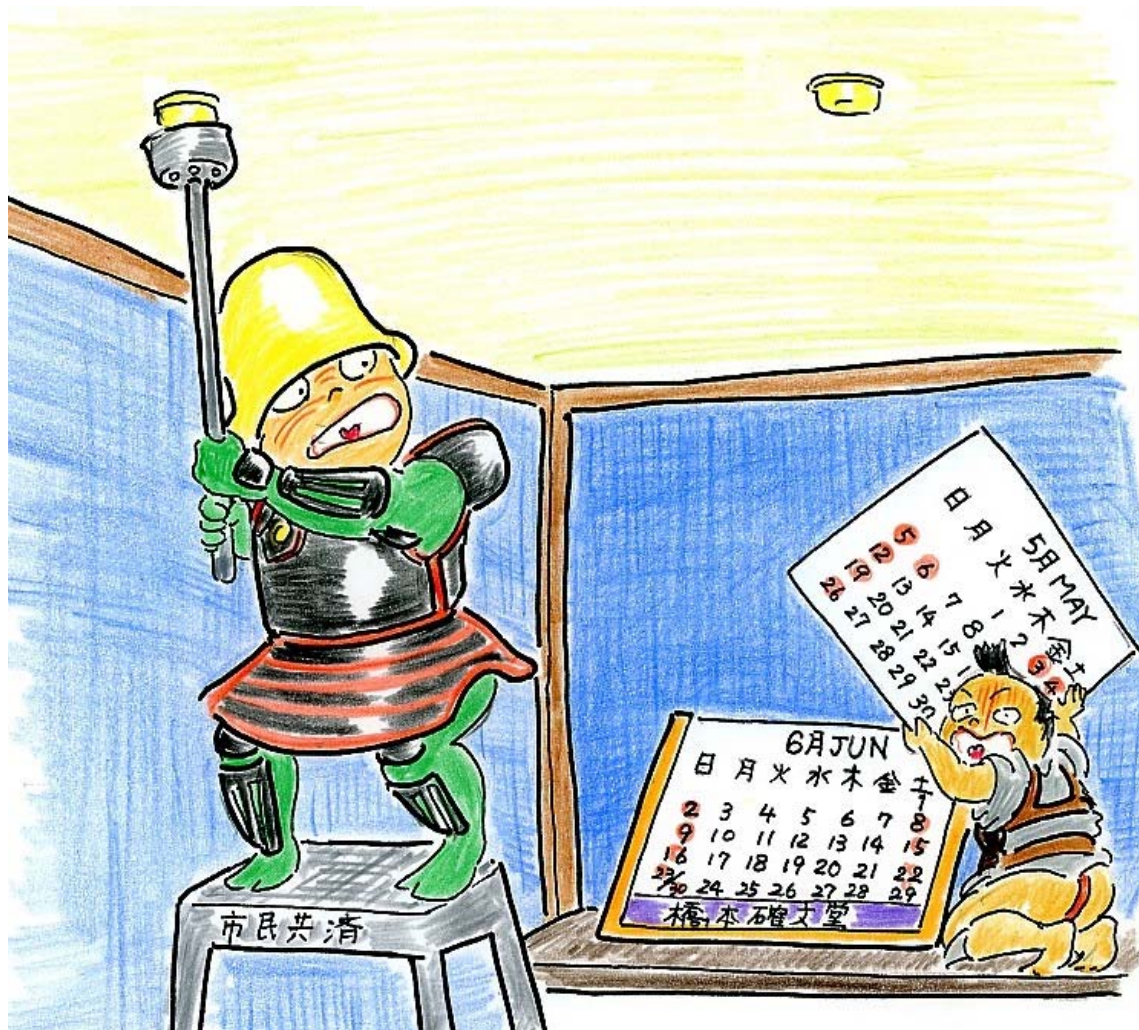
～火災を起こさないために～

Vol.43

「ねえねえ旦那様、なんで6月は祭日がねえんですかね？」と、お屋敷を点検

中のご助がカレンダーをめくりながら拙者に聴いてきたのですじゃ。

「祭日？うーん、そお言われれば6月には祭日が無いな。」



「おかしいじゃないですか。他の月にはちゃんとお休みがあるのに、2月なんか1年で一番短い月だって言うのに、11日の建国記念日と23日の天皇誕生日があるんですぜ。不公平じゃねえですか！」



「???不公平じゃと?何が言いたいのじゃ?」

「い、いえね、ただ7月からは子供は夏休みじゃねえですか。無理して海の日まで作らなくても・・・そいつをちよいと6月に回せねえかなって・・・。」

「・・・嘘じゃな。どおせ梅雨時でうっとうしくなり、体を休める日が欲しいと思ってることじゃろ。 待てよ? そおかご助、確かお前の誕生日は6月の

30 日じゃったな。 おや、明後日は 30 日、そちの誕生日じゃないか。ははん、それで休みがほしくなったのじゃな。」

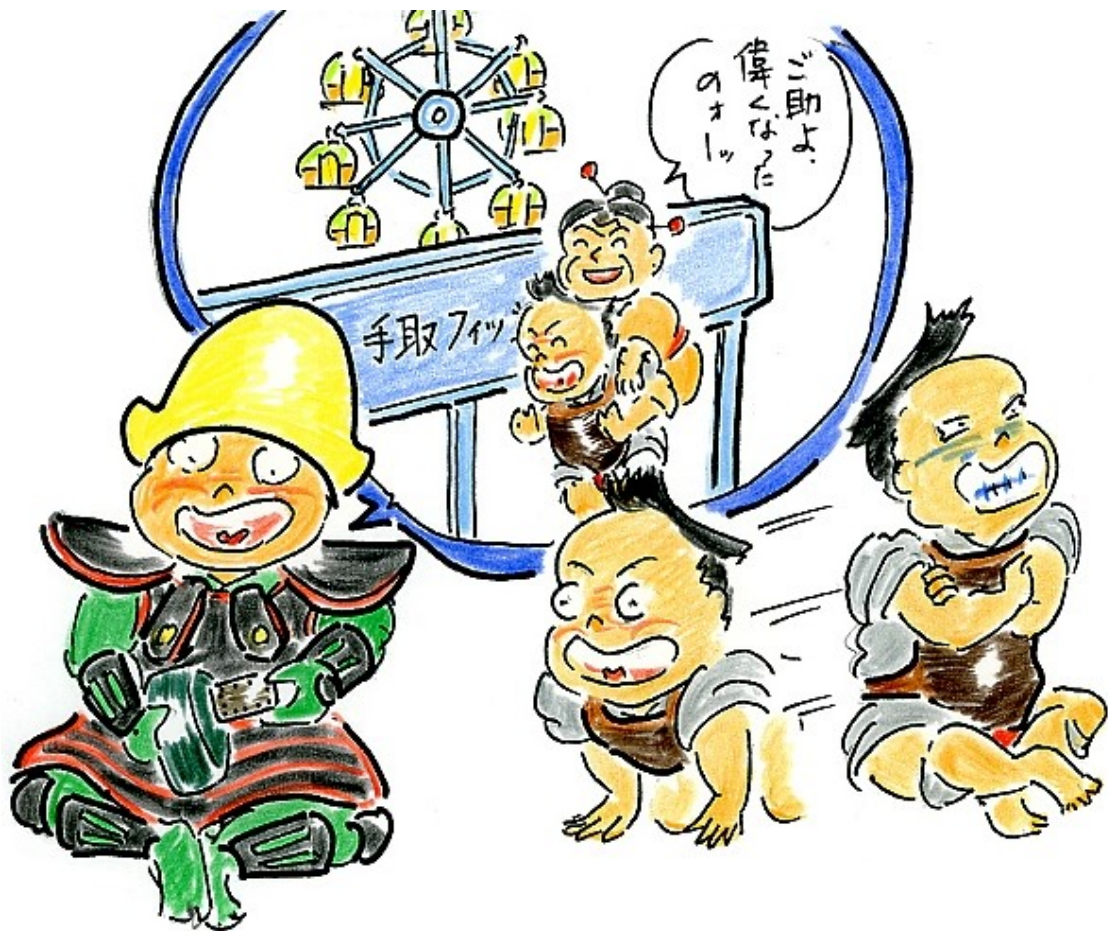
「い、嫌ですよ・・・べ、別に誕生日だから休みを呉って言ってるんじゃねえんですって。」 「ははは、相変わらずじゃな。そちが嘘をつくときは決まってちょん髷が立つんじゃ。」

「て、てやんでえ。男一匹中間のご助様が、たかが誕生日に休みを呉れなんざ、情けなくって・・・。」

「うむ、ご助休みをやろう。」

「言えるもんじゃ・・・。 へ？旦那様、お休みを？・・・頂けるんですかい？」

「うむ。やると言っておるではないか。考えてもみれば5月の連休中も休みなして点検に付き合わせてしまったからな。よい折じゃ、明後日まで休みを遣わす。田舎のおっかさんと一緒に手取フィッシュランドでも行ってくるがよい。」
と拙者は半紙に1分金を2枚（約4万円）包むとご助に渡したのじゃった。



「へ？・・・へ？」と　ご助は手にした半紙と拙者の顔を交互に見ておったが

「だ、旦那様。恩に着ます。」と恭しく半紙を頂いたかと思うと、クルリと踵を返し、

「やったー、第6レースに間に合うぜ！」と叫びながら番小屋へと駆け出して行ったのじゃった。

「あっ、これこれご助まだ点検の途中ではないかっ！」と叱る拙者の声も聞こえておらぬのか、一目散に番小屋の中へと消えるご助を見送りながら

「やれやれ困ったやっちゃん。第6レースとか言っておったが・・・何じゃろうな？」と拙者はご助が放り出していった点検器具を片し、次の点検力所へと向かったのじゃった。

一刻（約2時間）後、全ての点検を終えた拙者が番小屋へ戻ると、ご助の部屋から小さな明かりが漏れ、更には

「よし、よし、そのまま、そのまま・・・」と微かにご助の声が聞こえてきましたのじゃ。

「おかしいのお、もう出かけておるはずなのに・・・テレビでも消し忘れたのかの。」と拙者がご助の部屋のドアを開けると・・・

なんと、そこには耳に赤鉛筆を挟み、手にした競馬ナイトの新聞を握りしめながら

「行け！行け！差せえ！マエダクイーンっ」と叫びながら手にした携帯ライトを床にガンガンガンと打ち付けるご助の姿があったのじゃった。



「あっ、ああっ、馬鹿馬鹿馬鹿、ハルキング！来るな！来るなああああ」 拙者は、ご助の鬼気迫る様子に気おされ、固唾を吞んで見ておったのじゃったが・・・ご助の手にした携帯ライトからモクモクと煙が出始め、パチパチと火花が上がり、続いてパアアッと携帯ライトが燃え出すのを見て

「ご助！ライトから火が出ておる！火事になるぞ！」と部屋に飛び込んだのじゃった。

拙者の声で我に返ったご助が

「あわわわッ、何で？あちちち？」と叫びながら放り投げた携帯ライトは、壁に当たると拙者の足元へと転がって、見るともなく見えた製造メーカーのラベルには

『〇〇電機 HINOI Made i n チャパン』の刻印が、



「〇〇電機 Made i n チャパン？ これはナイト（製品評価技術基盤機構）

から、リチウム電池の不良でリコールの情報提供があった製品じゃないか！

確か、先日交換するよう言いつけ、お金も渡しておいたが、ご助。」と、拙者

は声を荒げ、ご助の方に向き直ったのじゃが、既にご助の姿は無く

「ご助っ」と、部屋の窓から外を見ると、頬かむりしてお庭をお屋敷の方へと

全速力で逃げて行くご助の姿が・・・。

「お、おのれ逃がしてたまるか！ チュータ！」 と拙者がお屋敷に向け声をあ

げると

「何じゃ。」と、しばらくして拙者の前に現れたのはお屋敷で飼われているハ

ムスターのチュータじゃった。

「お屋敷に逃げたご助を捕まえるのじゃ。猫のミーは気まぐれで捜査におかぬ。

ここはお主に頼もう。報酬は樫の木の箸じゃ。かじり応えがあるぞ。」という

とチュータは



「喜んでーっ」と、拙者に背を向け、拙者がその背に乗ると、ゴオオオッと風を切り、お屋敷へ。

お屋敷に着くと、チュータは器用に雨どいを伝い、換気のため開いていた2階の窓からお屋敷の中へと入って行ったのじゃった。



「どこを探すんでさ？」と目明しのように語るチュータに

「任せておけ。彼奴^{きゃつ}（意：ご助のこと）の行く先は主様（市民家当主）の書斎かキッチンに決まっておる。まずは主様の書斎へと行ってくれぬか。」と拙者が頼むと

「支援、こう暗くちゃ何も見えんぞ。」とチュータ。

「あん？チュータ、お主はネズミじゃろ？夜行性じゃろうが？」と聞き返す拙者に

「何をたわけたことを・・・儼らは人間と共存の道を歩むことに決めハムスターとなり、昼は適度な運動と食事、夜は睡眠の生活を何十、何百、何千、何万

世代と繰り返しておるうちに夜行性を捨ててしまおうて、今では投光器がないと
夜のお庭の散歩も出来ぬ始末よ。まあ、非常時のためにと用意はしておるがな。」
と言うと、災害時持出リュックから携帯ライトを取り出し

「支援これを貸してやるが、レンタルは別料金な。」と言うのじゃった。

「おお、かたじけない。しかし準備が良いのう……。災害は忘れた頃にと申
すが、拙者も含め皆もこうありたいものじゃな。」 拙者は携帯ライトを受け
取ると、これから向かう先をチュータの背から照らしたのじゃった。

「こっちじゃな？」チュータはライトの照らし出す方向へと歩を進めた。



その頃ご助は、キッチンのシンクの下に潜り込むと、奥方様が先日漬け込んだばかりの梅酒の蓋と格闘しておったのじゃった。



(令和6年7月号に続く)